台風の眼

日野啓三

新潮社

著者紹介　1929年東京生れ、東大文学部社会学科卒。学生時代から文芸評論を書き'52年読売新聞社外報部に入る。ソウル、サイゴン特派員を経験したのち小説の執筆を始める。著書に『あの夕陽』（芥川賞）『抱擁』（泉鏡花文学賞）『砂丘が動くように』（谷崎潤一郎賞）『夢の島』（芸術選奨文部大臣賞）『断崖の年』（伊藤整文学賞）の他、代表作として短篇集『天窓のあるガレージ』『夢を走る』、エッセイ集『都市という自然』などがある。

台風の眼

一九九三年七月一〇日発行

著　者　日野啓三

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

電話（営業部）03―三二六六―五一一一

（編集部）03―三二六六―五四一一

振替　東京四―八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

© Keizo Hino 1993,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

価格は函に表示してあります。

ISBN4-10-317803-5　C0093

台風の眼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

序章

「墓はからっぽだな」とゴーストが言った「墓石があるだけだ」

私も実は父の墓に向かって立ったとき、漠然とそう感じたのだが、何となく気おくれがしてそう意識化するのをためらっていたのだ。こういうとき、たいてい彼が現れる。はっきり現れることがあり、ぼんやりと影のようなときもある。声だけはいつも明瞭だ、自信にみちて。自信ありげな人間は、私は好きでない。だからゴーストも好きではない。だが妙な権威、といって言い過ぎなら、一種の力が彼の言葉にあることは認めざるをえない。

彼はいま古い墓石の列のうしろにまわって、一面に苔に覆われた側面に刻まれた字を読んでまわっている。

「文久二年って明治のどれくらい前だったかな。石だけはよく立っているよ。だいぶ傾いているけど。それにしても昔の墓石は小さくて貧弱だな。その頃は金もうんとあったはずなのに」

確かに二十個以上並んだ墓石の中で、時代が下がる墓石はだんだん大きくなり、父の墓は丈が高く滑らかに黒光りしている。

父は一九八〇年代の末、九十歳を目前にして老木が枯れ朽ちるように死んだ。死ぬ何年も前に自分で墓を作らせてあった。死んで一ヵ月後、台座の横の方から骨壺を墓に収めた。母と弟妹た

ちが一緒だった。
父の墓前の花立ての枯れた花を捨てて、持ってきた新しい花を入れる。水を持ってこなかったが花立てには雨水が十分溜っていた。それから墓所の屋根つき休憩所の隅にあった竹箒で散り敷いた枯葉を掃き集めた。
墓所は父が住み残した古屋敷と隣り合った小山の北向きの中腹にある。下からの山道の両側も、墓所のまわりも、手入れされていない雑木が茂り放題で、その木洩れ日が古い墓にも新しい墓石にも、同じように点々と光の斑模様を落としている。
石と光の斑点がつくり出す自足した静寂があるだけだ。墓石の下で父の霊が眠っているあるいは息づいている、というような気は私もしない。
近くの梢で鳥が鳴いた。鳴くというより叫ぶといった方が正確な、きつく鋭い声だった。
父はいなくなったのだ、と不意にはっきりと感じた。葬式のときも火葬場でも納骨のときでさえ、あいまいなものがまといついていたのに。
父は自分の時間を使い尽くしたのだ、ほとんど一世紀に近い時間を。いまさら眠りこんでいる時間などない。
「墓が見事にからっぽだというこの感じには、何かこう詩的正義というような潔さがあるな」
古い墓の列の間に見え隠れしながら、ゴーストが言っている。
あいつにしては気の利いた言い方だ、と思ったが、私は集めた落葉をどうしようかと考えた。最初燃やそうとも思ったが、灰にかける水がないことに気づいて、墓所の下の斜面にまき捨てる

ことにする。落葉を両手ですくい上げると、ハサミムシが黒いハサミを振り上げて怒った。
ゴーストは手伝おうともしない。墓所の地面の端に立って、斜面に密生した雑木の枝越しに下の屋敷を眺めている。この高さからだと、屋敷とその周囲のほぼ全景が眺め渡せる。
父が最後の三年間ほど母と一緒に入院していたため、全く手入れされていなかった古屋敷は、築山のある広い庭も、まわりの竹やぶや菜園も、荒れきっている。庭木は茂り放題、竹も地下茎が伸び放題で、塀が押し倒されかけている。菜園と果樹園は雑草の巣だ。父の死後、母は東京の弟のところに移ったので、屋敷はいま完全に無人である。
抱えた落葉をほうり落としながら、散ってゆく落葉の間から見える屋敷の荒れ様に心が痛む。第二次大戦の敗戦のあと朝鮮半島から引き揚げて以来、父はひたすらこの屋敷の維持と手入れに後半生を費してきた。
「墓よりも屋敷の方に、おやじを感ずるな」
と私が呟くと、ゴーストは肩をすくめた。
「昔の地主屋敷はとっくに寿命が尽きてるよ。風葬になってるわけだ。火葬はできないから。でも風葬の死体には威厳がある」
ふたりは墓地の端に立って、建ってから百年を越すという古屋敷をしばらく眺め下ろしていた。背後の墓所は静かだったが、屋敷では川音のような音をたてながら、衰退の時が流れているように思われた。伸び続ける植物たちも生命力のしぶとさというより、荒廃のドラマのあられもない進行を、まざまざと感じさせる。

四月末の晴れた午後の光が、空にも地面にも溢れているだけに、余計古屋敷の荒廃が際立って見えるが、陰々滅々の暗い感じはない。むしろ春の光の異様なほどの明るさは、解体という現象も世界の正常な運行の一部であることを思わせもする。時間というものが空間と別のものではなく、その分け難い一部であること、いわば空間のもうひとつの次元でもあるかもしれないことを暗示するようでもあった。

屋敷の荒廃のことを考えているつもりが、いつのまにか父のことを考えていた。若かった頃、一年に一度ほどの割合で父の家に戻ってくる度に、熱心に庭木の手入れをし、裏手の藪から伸び出してくる竹を切り、菜園の雑草を取る父の姿に、言いようのない徒労感を覚えたものだった。どうせ古びてゆく屋敷の時間の流れに、やみくもに逆行する愚かな行為のようにも。

だがそんな時の流れに逆行するようなことが、あの屋敷の時間だったのであり、父の時間でもあったのだろう。少なくともいま、眼下の古屋敷では時間が奇妙に渦巻いているように見えた。もう冬の間に麦を植えないようになってから久しい田んぼのひろがりは、まだ去年の稲の切株の残っているところが多い。以前だったら冬枯れの感じと結びついていた切株だらけの田んぼの眺めも、きょうは甘味を含んだ春のにおいが一面にひろがっていて、村の端にある亡父の屋敷のまわりのところだけ、ゆったりと回転しているようだった。

初めは荒廃の気にみちて感じられた古屋敷が、次第に不自然に見えなくなってくる。むしろふしぎに濃い空気がそこから湧き出して、いまではほとんど新しく建て直され東京の郊外住宅とほとんど変わらない当世風の農家が点在する村の方へと滲み出している。稲の切株と、レースのカ

ーテンのひるがえるのが見える新しい家々との一見そぐわない感じが、やわらげられ中和されて見える。

「天気が良くてよかった」とだけ私は言った「秋の終わりの曇った日だったら、きっとやり切れない眺めだったにちがいないから」

ゴーストは意外に口をはさまなかった。いつもは何を考えているのかなかなかわからないが、いまは同じようなことを感じているのだろうと思う。「やり切れない眺め」と言ったとき、屋敷の様子だけでなく、父の生涯も私は考えていたのだったが。

村は中国山脈の奥から瀬戸内海へと流れ出る中程度の川の片側にある。二つの山並みが川をはさんで連っている。その細長い川沿いの平地の真中を鉄道と幹線道路が走っているのだが、村は鉄道が通っていない方の側だ。二十年ほど前から幹線道路のある側の方は店や住宅もふえたが、こちらの方は農家が新しく建て替えられた程度で、戸数はむしろ減っている。

「この家が川の向こう側にあったら、高く売れるんだがな」と生前に父は言っていたが、もしそうだったらこの古屋敷も高度成長のクレージーな時間にまきこまれて、ゴーストの言い方を借りれば「風葬の威厳」をもつことはなかっただろうし、父も自分の時間を生き尽くすことはできなかっただろう。

「わしが死んだら、この家はどうするつもりだ」とも父は始終言っていた。東京から戻って古い家を守る気のない私はその度に、後めたい思いをしたものだったが、だから簡単には死ねないのだ、という気持が、父の生命を支え続けてきたに違いない。自分が死ねば屋敷も確実に荒廃する、

という絶望が父の時間だった。偶然による地価の高騰などという希望より、いかに本ものの時間だったろう。

いまや屋敷をまわりじゅうから覆いつくそうとする植物たちの猛威、とりわけ裏手の竹藪のほとんど肉食動物めいた貪婪の影の向こうで、川すじが光っている。いまの季節、水量は乏しいが、銀色のきらめきは美しかった。

決して景気のいい地方でも、豊かな村でもないが、春の光の穏やかな波長とともに、空間は息づいている。同じ屋敷、同じ村を眺めながらの父の半生の時間が、晴やかな空間に溶けこんでいる。濃密に。

こういう感覚は明らかに意識した限り初めてのことだったので、意外でもあったし驚きもした。私にとって時間とは流れるものでしかなかった。

実際時間は流れるものでもあった。一方向に。すでに墓所に登ってきて一時間以上たっていることに気付いた。

「降りようか。運転手が怒ってるぞ」

私は袖口とズボンの裾についた落葉をはたきながらゴーストに言った。

「電車の時間がある。奥の方まで行く電車は遅くまでないんだ」

私は中国山脈を横切って出雲地方の山奥まで行く途中だった。新幹線を下車した駅前から乗ったタクシーを下の屋敷の横に待たせてある。

山道を降りながら私は言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「どうして出雲の奥なんかまで出かける気になったと思う？」
「あんたのことだから、何か目的があってのことだろ。気まぐれに旅に出るほど、あんたは心が豊かじゃない」
「それが今度はそうでもないんだ。きっかけは一年少し前のおやじの葬式のときだった。いまおれたちが降りているこの小山にも名前があるのかな、と何気なく近所の人に聞いたんだ。別に深い意味があったわけじゃない。そしたらイモジヤマだ、と村の人が言う。ヘンな名前なんでおれが怪訝な顔をすると、鉄をつくる鋳物師の山という意味だという。これにはいささか驚いた。ここは昔から純然たる農村だとばかり思ってたんで。うちの祖先と関係があったかどうかはわからないけど、この山の上の方に、切り出した石をきれいに組み上げた石室古墳の跡もある。小さなものだけれど、石室の墓とか製鉄師というと、出雲から朝鮮半島のにおいがするじゃないか。おれはもともと先祖探しの趣味なんか全くないんだが、この間、出雲の奥に古い製鋼施設が残っているという話を偶然聞いて、行ってみる気になったのさ。イモジヤマのおやじの墓にも寄ってね。だいたいあの川向こうの鉄道を奥まで行ったこともなかったから。まあおれとしては珍しく気まぐれに近いことだ」
　ゴーストは何か言いかけたが、顔にぶつかりそうになった小枝を黙って折り取っただけだった。偶然に意味をつけたがるのは頭の弱い証拠だ、とでも言おうとしたのだろう。
　だが私としては、両側に山並みが迫った川沿いの狭い土地とばかり思ってきたこの地方の奥が、大陸まで開けていたらしいという思いは意外に新鮮だったのだ。

小山を降りると、大きくて甘い実のなる富有柿の木が二十本ほどあったのに、いまは萱が生い茂って柿の木も見分けられない。屋敷の塀に沿った道も両側から雑草が覆いかぶさっている。塀の中まで入る時間はなかった。入ってみても数時間ぐらいではどうなるものでもない。

瓦屋根のついた表門の柱はそれでもがっしり立っていた、門扉の板の端の方は白く風化し始めていたけれども。扉の上には亡父の表札がかかったままだが、不自然な気はしなかった。いま僅かばかりの固定資産税は私と弟が払っているけれど、これは父の家だ。父とともに死んだ屋敷だ。

父の葬式のあと道具を整理していて一枚の古い写真が出てきた。かなり大判の写真で、ほとんど変色していなかった。築山を背にして、大叔父、祖父の死後大叔父と再婚した祖母、東京の大学に行っていたときの父、数年後にあいついで肺結核で亡くなった旧制高校生と中学生の二人の叔父や叔母の六人の家族がきちんとした服装で、立ったり椅子に腰かけたりしている記念写真風の写真だった。全員が緊張した顔をしていた。だが私がその写真に強く印象づけられたのはむしろ人物たちではなく、庭と建物の姿だった。屋敷はいまとほとんど変っていない。築山があり泉水があり庭木があり表門の一部も離れ座敷のひとつも納屋の並びも、正確なピントで写っているのだが、庭木や踏石まで屋敷じゅうのすべての物が、生きものも無生物も、かっちりと生きているのだった。物の輪郭が定まって、陰影は明確で、それぞれに自分の重心を持っていた。雑草など一本もなかった。庭木は刈りこまれていた。直接には写っていないが、多数の使用人の影が感じられた。屋敷の全体が生きていたのだ。実在していたのである。

実在するということはこういうことなのだな、と私は強く印象づけられたが、そうかといって

背の高い雑草が歩けないほど茂り、庭木にはクモの巣が張りめぐらされて、そこにひっかかった枯葉や虫の死骸が揺れている現在の庭の光景が、悪夢のようだとも幻影のようでしかないとも思ったわけではない。

かつて頑丈な塀の中に閉じこめられていた時間が、いま思いきり開放されたのだ、と思ったのだが、ゴーストがそう言ったのだったのかもしれない。考えてみれば、それは私より彼の思想に近い。

タクシーの運転手は、表門から坂を降りた昔の水車小屋の跡に車を停めて、その傍で煙草を吸っていた。

「むかしは立派なお屋敷だったようですなあ」

待ってる間に屋敷のまわりを歩いてたらしく、運転手がそう言った。

「いまの方が威厳があるよ」

ゴーストは素気なく言って、自分から先に車に乗りこむ。

私は予定よりかなり長く待たせたことを詫びてから、川向こうの鉄道の駅の名前を告げた。

車は土手を越え、川を渡り、幹線国道を横断した。国道はさすがに車やバスがかなり走っていたが、そこを越えてから人が少ないことに気がついた。

国道から鉄道の駅までは、田んぼの中に町工場や農家が点在しているのだが、通行人にひとりかふたり出会ったか。駅に近づくといっそう人の気配が薄れた。小さな駅だが、駅前にはパン屋とかうどん屋とか電気器具屋、スーパーマーケットも並んでいる。それなのに人影がほとんどな

い。店は開いていて店員の姿は見えるのに。
傾きかかった午後の陽が、かすかに赤黄色く色づきながらもいっそう明るい。明るすぎてほとんど金色にさえ見える。前夜強い雨が降った跡はないのに、空気が異様に澄んでいた。
駅の小さな待合室も老女がひとり坐っているだけだった。時刻表を見ると列車がくるまで三十分以上もある。
待合室を出て、駅前の道路を歩く。
「明るすぎて静かすぎて、何だか気味悪いみたいだ。何かあったのかな」
学校を出てからは、私は東京から一年に一度二、三日間ずつぐらいしかここに戻らない。しかも新幹線の駅からタクシーに乗るので、この鉄道の駅のあたりは少なくとも二十年は来ていない。遠い記憶と比べると、店が多くなっているのに反比例して人がいなくなっている。
私たちは一軒だけの喫茶店に入った。その中も他の客はひとりもなく、窓からの光だけがそれほど広くない室内の隅々まで照らしていた。中年の女性が黙ってコーヒーを運んできてから、カウンターの後からも消えた。
光のなかに私たちだけだ。
「日本の田舎ってこんなに人がいないのだろうか。そう言えば屋敷の近くにも人影は見えなかったな」
「東京の住宅街だって平日の昼間に人はぶらついてないぜ」
「そうだけど、ここは曲がりなりにも駅前の商店街だよ。もっと妙な感じだ。妙な、としかうま

く言えないけど。ちょっと神秘的な気分でもある」
「動くものが見えないと時間の感覚が薄れる。時間感覚が薄れると、空間の知覚が豊かになる。明るく充実してくる。それだけのことさ」
ゴーストにそう言われても、思いがけなく別の世界に、少なくとも別の空間にふと入りこんだような感覚が抜けない。幾分異様だが不快ではない。意識まで透きとおってくるみたいだ。墓地に少し長くいすぎたのか、人が死ぬということがどういうことか初めて深く自然な知覚として経験したからだろうか。つまり世界がどういうものかが少しわかり始めたのか。
田舎の喫茶店にしては意外にコーヒーがおいしかった。白いコーヒーカップの内側に、窓からの日ざしが斜めに射しこんでいる。コーヒーの水面でクリームの脂が細かく光っている。
「何だか時間が溶けたみたいにいい気持だ。知らない町の知らない店で」
「もともと時間なんてないのさ」
ゴーストは醒めた声で言った。
「何も興奮するほど新しい発見でも何でもない。アフリカかオーストラリアの採集民のなかには、いまでもきのうと明日という言葉しか使わない部族がいるそうだ。一昨日、一年前、一年後という言葉がないんだ。漠然と今より前と後の感覚しかない。生物というのはずっとそうして生きてきたのに、ある時期、そう遠い時期じゃないある時、私たちの祖先が自分たちもやがて必ず死ぬということに気付いた。とてもこわい発見だったと思う。それ以来、その避けられぬ死に向かって一方的に流れる時間というものが、世界に出現したんだ。世界はこわいところになった。人生

は苦悩になった。計り知れないその流れのうちの、わずか三十年、五十年の小さな線分が、自分の生涯ということになっちまったから」

コーヒーをひとくち飲んで、窓の外に目をやった。電気器具屋と小さな本屋との間から、田んぼのひろがりが見える。田んぼの土は乾いてひび割れていたが、畦道に沿って青く草が生え始めている。遠く国道を走る車の列。空気が揺れている。田んぼいっぱいの光が揺れているのかもしれない。ふっと遠い車の列が、荒野のラクダの列に見え、空間がふしぎに濃く穏やかな気配で満たされるのを覚えた。車は渋滞しているらしく、ラクダの列はのろのろと、電気器具屋と本屋との間の彼方を動いてゆく。何の物音もしない。

「こんなことっていうのがあるんだな、思いがけない場所で思いがけない時に」

ラクダの列のことは言わなかった。いつまでもこうしていたかった。

店を出てもあたりは変わっていなかった。駅の前の郵便ポストがひっそりと燃えるように赤い。切符を売ってくれた駅員が、そのまま改札口に立った。

ホームに出ると、真直な線路がずっと続いているのが見えた。ほとんど真直である。そして線路は単線だった。この鉄道が単線だったことも忘れていた。列車の車輪が触れるレールの部分だけが、複雑な色に光っている。枕木と砂利の部分は、鉄粉がとんで錆びていた。

「間もなく下り列車が入ります」

と駅員が独り言のように言った。

線路のはるか向こうに電車が小さく見えた。だが電車はのろのろとしか近づいてこない。新幹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com